

助産師による“いのちの教育” すべての子どもに「生きる力」を

今、子どもたちに一体何が起きているのだろうか…。自分で自分のいのちを手放す子どもたち。連鎖現象とも思える、子どもを取り巻く異常事態。じつは、私は以前からこうした事態がいつ、どこでおきても不思議では無い…そんな危機感を募らせていました。多くの子どもたちからの、「生きていることがつらい」という心の SOS サインを受け取っていたからです。

1、いのちの証言者として、今子どもたちに伝えたいこと

私は、30年近く助産師として、命の現場で仕事をしています。今までに千人以上の新しい命の誕生のお手伝いをしてきました。命に寄り添う職業人として、命が粗末にされる事件が起きるたびに、悲しみで胸が締め付けられる思いになります。新しい命が生まれるためには、いかに多くの困難を乗り越えなければならないのか知っているからです。時には母親の命を奪うことすらあります。高度な水準を誇る今日の医学をもって、救い得ない生命もあります。世界規模で考えると一年間で40～50万人の母親が自分の身体から新しい命を産むときに亡くなっています。1分間に1人の割合です。子どもも同じです。生きて生まれてくても、力尽きて永遠に産声をあげることができない幼い命もたくさんいます。こうした、生を得るために繰り広げられる熾烈ともいえる戦い。お産は自然の営み。でも自然は時には過酷です。新しい命が生まれるということは、まさに命懸けの大事業。だから、未来に向かって羽ばたこうとしている若い命が失われるということは、言葉にあらわせないほどの衝撃なのです。しかも、“いじめ”という卑劣な行為の犠牲になって…。いじめられている子だけでなく、いじめている子どもにも目の当たりにして欲しいと思っていることが有ります。それは、全身の毛穴から脂汗を流し、気が遠くなりながらも、新しい命を産み出そうと必死でがんばっている母親の姿です。そして、陣痛のストレスに負けないで「生きて生まれたい」と力を振り絞っている胎児の姿です。かつてのあなたもこうして、生を受けたということ、一人一人がみんなかけがえの無い大切な存在だということに気づいてもらいたい…。そうした願いからです。

中学生は思春期真っ盛り。大きな海原に漂っている小船に例えるなら、今にも呑み込まれそうになりながら、大きく揺れ動いています。「生まれてこなければよかった」「私なんか死んでも誰も悲しんでくれないただのモノ」と悶々と生きている子どもたち。子どもから大人の架け橋である、思春期橋を渡り損ねている子どもたちに伝えなければならないことが有る。多くの人たちの願いの中、あたたかく見守られながら、この世に送り出され

てきた時の事、赤ちゃん自身も、すべての力を振り絞って産声をあげ、生きることを自ら選び取った時のことを、一部始終話してあげたい。それが命の証言者としての役割だと思いました。そして、いつの間にか、私は学校の子どもたちや親の前に立っていました。折りしも、神戸の児童殺傷事件が日本国中を震撼させた時でした。あれから、10ヶ年間の歳月が流れようとしています。

2、「いのちの大切さを伝える出前講座」を仲間の助産師と取り組んで9年目

今、助産師会の10人の仲間たちと、専門職として培ってきた経験を生かし、県内の小学生と保護者対象の「いのちの大切さを伝える出前講座」にも取り組んでいます。学校の教育力を高めるために、地域社会の人材を活用している学校も増えてきましたが、私たちもその一環として出向いています。昨年度は県内の小学校だけでも100校、児童・保護者たち12,569人に実施できました。この学校数は県内の全小学校数の約3分の1に当ります。今年度は、さらに増え115校から依頼を受けています。子どもの心に響くメッセージを届けたい、そんな願いで毎月一回行うメンバーの定例会は、9年間欠かしたことがありません。今まで、100回以上重ねてきました。マンパワーの育成、体制整備、教材作り、指導技術のスキル等も通年かけて準備しています。そのためにメンバーは病院に常勤務として就職しないでがんばっています。あまりにもエネルギーを要するため、両立できないからです。限りなくボランティアに近い本事業に寄せるメンバーの原動力は、何ととっても、子どもたちの耀く瞳と笑顔との出会いです。どんな僻地にも依頼が有るところなら県内くまなく出向いています。先月は、全校生徒23人の片品武尊根小学校にも出向いてきました。講座は子どもたちと一緒に保護者にも参加していただきます。一人でも多くの保護者の参加が得られるよう、授業参観や学年行事、親子行事等での取り組みを学校にお願いしています。昨年100校の保護者参加率は60%でした。

こうして、小学校は助産師会の仲間たちと一緒に取り組んでいます。それ以外の幼稚園・保育園、中学校や高校、県外は、私が主宰している、ボランティアグループ「は～とふるすべ～すはぐくみ」で対応し、一年間約50会場に出向いています。

3、いのちの講座で伝えたいこと

講座のねらいは自尊感情を育むことです。命のかけがえの無さ、大切さ、素晴らしさを実感し、それを共有することをおして、自分自身の存在を肯定できる。自分自身を大切に思えることにより、他の人も大切にできるようになれることを目指しています。

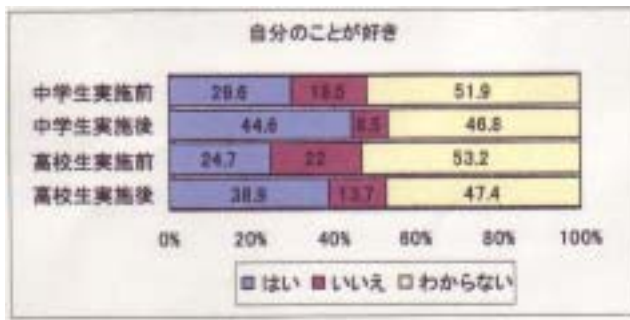
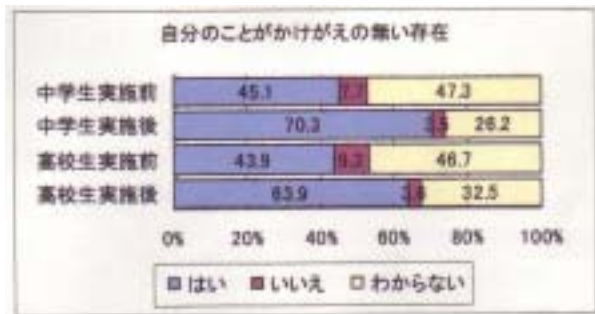
小学校の講座は親子で60分間。対象学年は1～6年生。「あなたにとって一番大切なも

のは何?」という発問から始まります。「いのち」という答えに、「どうしていのち?」と考えさせます。さらに昨年、講座を受けた県内100校の児童対象に行った事前アンケートで、7,515人のうち900人(12%)が「自分が死んでも生きかえる」と答えていたことに触れ、本当にゲームのようにリセットできるのかどうか考えさせます。また、講座は体験学習に重点をおいています。いのちの大切さを言葉だけの知的理解でなくて、実感として深くこころに刻み込めるよう情動による理解を得ることが大切だと思うからです。助産師の特性を生かした教材作りには多くのエネルギーを注いでいます。9年間、試行錯誤を重ねながら開発してきたオリジナルのものばかりです。それぞれの発達段階に応じて、教材も異なります。その他に、生きた教材も登場します。妊婦さんに協力していただき、胎児心音を聞かせ、児童の心音と比べます。医療器械のドップラーを通じて聞こえてくる胎児心音が、自分たちの心音と比べてはるかに速く、母親の胎内ですでに息づき、いかに速く成長していたのかという気づきを与えます。折り紙で空けた針の穴。これが一番最初の自分の身体の大きさだと分かると、大きな歓声が上がります。胎内で280日間、2000倍の大きさに成長するという事は、まさに驚異の世界であること。母親から大切に守られているだけではなく、自分自身も、多くの能力を生かしながら成長していた証。それが胎児心音の速さの意味だということを知させます。さらに3・5・8ヶ月の胎児モデル、新生児モデルを抱き、自分の成長に改めて気づきます。一番盛り上がるのは、お産模擬体験です。開発した教材「うまれ～る」を使用し、モデルの子どもが実際に子宮袋から生まれてくる体験をします。次にお産のVTRを映写します。家族みんなであたたかく見守られる中、新しい家族を迎える様子や胎盤呼吸から肺呼吸に切り替わり、赤ちゃんが紫色から全身ピンク色になる瞬間を鮮明に捉えています。高崎のご家族がモデルになってくださった貴重なオリジナルの映像です。講座のまとめでは、子どもたち一人一人が「待ち望まれて生まれてきた、世界でたった一つの宝物」であること。さらに生まれる時は「母親もがんばったけれど、赤ちゃんもがんばった」そのことは「自分に自信を持っていいこと、誇りを持っていいこと」と自尊感情につなげていきます。最後に、使用权をクリアしたレナルトニルソンの胎児シールを貼った「いのちの始まりのカード」をプレゼントして、これから、学校でいやなことがあったら、カードを見て、講座で学んだことを思い出してと伝え終了します。その後保護者には、20分間話しをし、家に帰ったら、子どもさんに生まれた時のことをきちんと話して欲しいとお願いしています。最近の悲しい事件の影響かと思われませんが、保護者の真剣さと緊張感が今まで以上に伝わってきます。

4、中学生・高校生の講座による自尊感情の変化

中学生や高校生の場合、講座により、どの程度自尊感情を高めることができるのだろうか。心の変化を把握するため、実際に講座を受けた子どもたち対象に、実施前と後にアンケートに回答していただきました。項目は事前10項目、事後5項目、そのうちの結果の一部を報告します。対象者は1,144人の中学生(5校)、1,777人の高校生(3校)。

その結果、中学生は「自分がかげえの無い大切な存在」の項目は「はい」が講座前45.1%、実施後は70.3%とかなり増え、「いいえ」が約半数に減りました。「自分が好き」の項目は「はい」が29.6%から44.6%に増え、「いいえ」が半数以上減りました。また、高校生も「自分がかげえの無い大切な存在」の項目は「はい」が講座前43.9%、実施後は63.9%とかなり増え、「いいえ」が約3分の1に減りました。



「自分が好き」の項目は「はい」が24.7%から38.9%に増え、「いいえ」が半数以上減りました。そのほかの「家族から大切にされている」「生まれてきてよかった」等すべての項目についても、より自己肯定できる

ような変化が見られました。改めて、家族に感謝すると同時に、自分に自信と誇りを持つような結果でした。「あなたの生きようとする力が、自分自身も、まわりのみんなも幸せにできる」というメッセージが伝わっているようです。自分が生まれてきた奇跡、今こうして生きているということは、今までに出会った数多くの困難を乗り越える力があったという証であること。だから「生きているだけで百点満点」という言葉のプレゼントをして講座を終了します。冒頭に記した子どもの SOS サインは講座終了後にいただく感想文です。いじめにより、苦しんでいる胸のうちを記し、自殺をほのめかす内容のものが少なくありません。ある中学3年生男子の感想文は、今にも消えてしまいそうな薄く歪んだ文字で、「...ボクはいじめを受けていました。小学校の頃からでした。毎日がとてもイヤでした。どうやって死のうか、どこで死のうか、そのことばかりでした。でも、今日、助産師さんから話を聞いて、元気になりました」と有りました。いじめから「お墓」まで作ら

れ、ショックで自分なんて消えていなくなったほうが良いと思って、紐で首を絞めていた子どももいました。身体中カッターで切り刻んでいた子。みんないじめが原因でした。でも、講座で話しを聞いて、多くの子が「もう、死にたいなんて思わない」「身体を傷つけることはしない」とふと立ち止まってくれました。

5、今後の課題

「いのちの大切さ」を子どもたちにどう教えたらよいのか、模索している教育現場の先生方は、新鮮な期待感で私たちを迎えて下さいました。当初メンバーたちは、子どもたちを前に、足はガタガタ、口はワナワナ、頭が真っ白になって何を話したかわからないほど緊張の連続でした。近所の子どもを集めて何度リハーサルをしたことか。懐かしい思い出です。9年間の歳月を経、今日では、小学校の講座は、NHK教育番組、学校放送教材 道徳「命ってあったかい」の授業のモデルにもなり、全国的にも先駆的な役割を担えるほどになりました。しかしながら、いくつかの検討課題もあります。小学校は定着しているとはいえ、全県域を見ると地域格差も有り、学校の温度差があるのも事実です。中・高校に関しては、実施している学校も少なく、まだこれからだと思います。「いのちの教育」は学校でさまざまな取り組みをされていることと思いますが、「いのち」と向かい合っている助産師だからこそ、伝えられるメッセージがあります。今回の調査結果がそのことを裏付けています。また、講座により高まった、自尊感情・自己肯定感をいかに維持できるかということも検討課題です。これは外部の私たちの守備範囲でなく、学校やご家庭にゆだねるしかありません。講座はあくまでもきっかけ作りに過ぎないからです。今回調査した学校については、講座4~6ヶ月後に再び同じアンケート調査し、自尊感情がどの程度維持できているのか、検証できればと考えています。また、少人数ながら講座後も、自己肯定できず、自尊感情が低い子どもたちがいることから、中学からでは遅いと感じました。小学校からの系統だった教育と家庭の教育力を高める必要性を感じました。多くの学校では、講座後、担任の先生が、人権や道徳、総合教育の授業等で効果的に展開、私たちの講座を生かして下さいます。先日読売新聞の教育ルネッサンスの紙面で大泉町立東小学校の、心遣い言葉遣いから「なくそうチクチク言葉封印」と題した、素晴らしい授業実践が紹介されていました。外部のしかも単発的な講座であるがゆえに、こうした学校との連携が必要に思います。「生まれてきてよかった」と「いのち」を人間らしく耀かせられるようにという願いを込めて、これからも「生きる力」を培い「生きる喜び」を感じられるよう、心の琴線に触れる「いのちの現場からのメッセージ」を、届け続けたいと思っています。